

序文

言語聴覚士が国家資格となって20年が過ぎようとしているこの時期に、標準化されたコミュニケーション・スクリーニングテストをお届けできることを心から嬉しく思います。

スクリーニングテストは、臨床の入り口として非常に重要なものですが、設問がシンプルで誰にでも簡単に作れそうに見えるためか、これまで日本では研究対象としてあまり取りあげられてきませんでした。私自身、長年の臨床の中で、数値化できる網羅的なスクリーニングテストの必要性を感じながらも完成までには至りませんでした。

「こうせいおそ後生畏るべし」という言葉が論語にあります。自分より後から生まれて来た若い人には大きな可能性があり、畏敬すべきものがあるという孔子の教えです。荒木謙太郎氏のSTAD（スタッド）研究に出会ったときの気持ちは、まさにこの言葉そのものでした。荒木氏は臨床2年目から一人でスクリーニングテスト作成に取り組んできました。その成果は第2回日本言語聴覚士協会の優秀論文賞受賞で認められましたが、それから標準化までには更なる年月が必要でした。STADの歩みは、第6章のQ&A「STADに至るまでの開発過程を知りたい」に答える形で詳しく述べられています。設問の一つひとつが精選されて、今回の出版までに至る16年の過程をぜひご確認ください。

スクリーニングテストは、単なるチェックテストではありません。初めて出会う人と人との大事なコミュニケーションのスタートであり、言葉を紡ぐ人間の高次な脳機能を総合的に観察する機会です。初回面接では定型の質問をしながらも、その人の「病前の生活はどのようなものだったのだろう」、「病気やケガを負って今どのような心境なのだろう」、「コミュニケーションを阻害している最大の要因は何なのだろう」、「納得できる生活に近づけるためにはどのような支援が必要なのだろう」との問いを心に留めておくことが大切です。そのうえで、対象者の客観的な情報を得るために、シンプルでありながらも信頼性、妥当性のある数値化された指標が必要となります。

今回の出版にあたり、荒木氏と時間をかけてディスカッションしたのは、人の精神活動の根源からコミュニケーションを見ていくことの大切さです。「意識を土台として、情動に左右されながら言語という高度な知的活動を行っている人間の全体像を捉えること」がスクリーニングの主眼であることをSTAD解説でお伝えしています。

コミュニケーションの重要な要素である言語・非言語の能力をスクリーニングするSTADが、言語聴覚士を目指す学生や言語臨床に携わる方々の指標となることを切に願っております。

2018年6月吉日

小藺真知子

目次

言語障害スクリーニングテスト (STAD) Screening Test for Aphasia and Dysarthria

序文 *iii*

第1章 言語障害の全体像をつかむ STAD の網羅性 1

- 1 言語聴覚療法におけるスクリーニングの位置づけ 2
- 2 意識障害下におけるスクリーニング 4
- 3 インテーク面接におけるラポール形成 6
- 4 STAD のアルゴリズム 7

第2章 13項目の目的と採点マニュアル 11

- 1 アイコンタクト 12
- 2 名前発話 13
- 3 見当識 14
- 4 構音器官 16
- 5 指示理解 17
- 6 手指構成模倣 18
- 7 構音交互運動 20
- 8 復唱 22
- 9 数唱 23
- 10 物品呼称 25
- 11 図形模写 27
- 12 名前書字 29
- 13 書き取り 30

第3章 STAD の臨床応用 33

- 1 スクリーニングに先立つ情報収集 34
- 2 初診と評価・診断・訓練のプロセス 36
- 3 コミュニケーション障害の重症度判定 42
- 4 訓練教材の運用の効率化 45
- 5 慢性期臨床での STAD 活用 46

第4章 ケースシリーズ 49

1 症例Ⅰ：軽度意識障害が残存する急性期失語症（発症3日）	50
症例Ⅰ：フォローアップ STAD（発症43日）	54
2 症例Ⅱ：両側橋損傷による構音障害（発症4日）	57
3 症例Ⅲ：情動の安定化がみられた認知機能低下例（発症1ヵ月）	62

第5章 STAD の標準化試験 67

1 健常ノルム算定試験	68
2 STAD の信頼性と妥当性	74
3 基準関連妥当性	77
4 STAD の中止基準	80

第6章 Q&A よくある質問 85

- Q1 構音交互運動に /pataka/ がないのはなぜですか？ 86
- Q2 読むモダリティーがないのはなぜですか？ 87
- Q3 非言語検査では何をみることができますか？ 87
- Q4 非言語検査が満点でも高次脳機能障害があるときがあります 90
- Q5 純粹失読の評価はどうすれば良いですか？ 91
- Q6 復唱に短文レベルがないのはなぜですか？ 92
- Q7 STAD に至るまでの開発過程を知りたい 94

あとがき 102

Column

- 効果的な STAD の導入法 19
- 聴力低下に対する STAD 施行の注意点 21
- STAD に用いる体温計のメリット 26
- 書き取りによくみられる反応 31
- 高次脳機能の乖離と除外診断 40

「言語障害 スクリーニングテスト (STAD) 記録用紙」のご案内

本検査の実施に必要な「言語障害 スクリーニングテスト (STAD) 記録用紙」は、言語聴覚士・学校教員や病院関係等の専門家の方に販売しております。

ご購入先を以下にご案内いたします。

● ご購入先

サクセス・ベル株式会社

TEL : 0823-45-5555 FAX : 0823-45-3535

<http://www.saccess55.co.jp/>

株式会社千葉テストセンター

TEL : 03-3399-0194 FAX : 03-3399-7082

<https://www.chibatc.co.jp/>

インテルナ出版株式会社

TEL : 03-3944-2591 FAX : 03-5319-2440

<http://www.intern.co.jp/>

言語障害スクリーニングテスト (STAD)

第 1 章

言語障害の全体像をつかむ STAD の網羅性

言語障害スクリーニングテスト (Screening Test for Aphasia and Dysarthria : STAD) は、信頼性・妥当性・健常ノルムの精度分析が行われ、脳損傷例に対する国内で標準化されたスクリーニングテストである。STADによる評価は、言語所見の詳細な描写や最終的な確定診断をもたらすものではないが、障害の有無や全体像を素早く効率的に把握する上で役立つ。とりわけ、長時間を要する神経心理検査への耐性に乏しい患者、ラポール形成にとって重要となるインテーク面接において、ベッドサイドなどの環境下でも患者負担少なく行えるツールとして有効である。

1 言語聴覚療法におけるスクリーニングの位置づけ

- 言語聴覚士のインテーク面接においてスクリーニングが果たす役割は少なくない
- スクリーニングの目的はコミュニケーション障害の全体像を大まかに把握すること
- STAD（スタッド）は信頼性・妥当性・健常ノルムが検証されたスクリーニングテストである

1. リハビリテーションの指針としてのスクリーニング

脳卒中治療ガイドラインでは、言語聴覚療法を発症早期から集中的に、専門的に行うことがグレードBのエビデンスをもって推奨され、コミュニケーション障害の早期発見・診断は、リハビリテーション効果を最大化させるステップにおいて重要である^{1,2)}。初めての面接はインテーク面接と呼ばれ、日本言語聴覚士協会急性期言語リハビリテーションの指針によると主に以下の3点が行われる。

- 1) **事前の情報収集**：カルテ、看護記録、他職種などから面接に先立って医療情報を収集する
- 2) **視診・問診**：食事場面や家族・病棟スタッフとのやりとりの様子や、呼名・あいさつ・言語聴覚士の自己紹介などに対する反応を観察する
- 3) **スクリーニングテスト**

これらを総合し、次回以降にどのような臨床を展開するか？といった大まかな治療計画が立案される³⁾。このように、スクリーニングテストはインテーク面接で行われるひとつとして挙げられ、その果たす役割は少なくない。

2. スクリーニングテストのメリット

教科書や学校の講義では、例えば失語症や何々障害というように、障害別にその解説が行われる。しかし実際の臨床場面では、それ以前の段階、すなわち目の前の患者がどの障害を持ち、どの障害はないのかの判断をすることが第一の関門である。患者にどの障害が認められそうか、またはどの障害が否定できそうかの大雑把な検討を短時間でつけるのがスクリーニング（screening：ふるい分け）の目的である⁴⁾。

もちろんスクリーニングテストによる評価は、言語所見の詳細な描写や最終的な確定診断をもたらすものではないが、障害の有無や全体像を素早く効率的に把握する上で役立つ。とりわけ、長時間を要する神経心理検査への耐性に乏しい患者、ラポール形成にとって重要となるインテーク面接において、ベッドサイドなどの環境下でも患者負担少なく行えるツールとして有効と考えられている。

3. 海外の言語障害スクリーニングのレベル

海外の言語障害スクリーニング研究に注目すると、欧米では歴史的にも古くから多くの言語障害スクリーニングテストが報告されている（図1）。

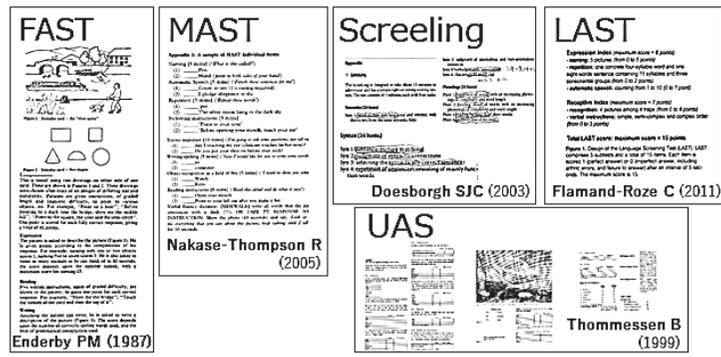


図1 海外の言語障害スクリーニング

2006年 Salter らの総説では、6種類のスクリーニングテストの精度が比較され、Enderbyら(1987)のFrenchay Aphasia Screening Test (FAST:イギリス)⁵⁾が優れたスクリーニングとして推奨されている²⁾。2017年 Hachioui らの総説では、計11論文で検証されたスクリーニングテストの妥当性試験を比較している⁶⁾。最もバイアスの少ない研究として Doesborgh ら(2003)のScreeLing(オランダ)⁷⁾が推奨されている。

これらの大規模な総説が示すように、言語障害スクリーニングは国際的に高い関心が持たれていることが推察される。

4. 日本の言語障害スクリーニングの現状

本邦における言語障害スクリーニングは、各言語聴覚士や各養成校によって独自に作られたものが多く使われている。しかし、「スクリーニングテストは学校や施設によってもバラバラで、何が良いのかもわからない」と不安を訴えるビギナー言語聴覚士は後を絶たない。あるいは経験のある言語聴覚士が新人・実習生を指導する際にも、根拠あるスクリーニングテストとして伝えられないといった不安も多く聞かれる。

本邦の言語聴覚分野においてスタンダードとなり得るスクリーニングがいま臨床的に求められている。

5. STADとは

言語障害スクリーニングテスト (Screening Test for Aphasia and Dysarthria: 以下、STAD) は、信頼性・妥当性・健常ノルムの精度分析が行われ、脳損傷例に対する国内で標準化されたスクリーニングテストである。開発のコンセプトは以下の3点である。

- ・ 被験者の負担少なく短時間でできる
- ・ ベッドサイドでも簡易に行える
- ・ 失語症・構音障害・その他の高次脳機能障害をスクリーニングできる

SLTA・WAB・AMSDなどの検査は、患者の状態・発症からの時期や、医療設備の事情などにより必ずしも行える訳ではない。急性期では、意識障害があったりして巣症状がクリアーに分からない場合が多い。全身状態が不安定で耐久性に乏しい際に、包括的検査の施行は困難、ないしは行っても有意な測定値は得られない。また、在宅医療では複雑で時間のかかる検査を施行し難い。そのような場合STADによるスクリーニングが、患者のコミュニケーション障害の全体像を短時間で把握する上で有用である。本著では笹沼(1985)が指摘する、スクリーニング検査がその本来の役割を十分に果たしうるための言語臨床⁸⁾と併せてSTADをより効果的に活用する方法について解説する。